

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 25 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520378

研究課題名(和文)ベケット作品/草稿におけるテキストと図：ライプニッツ的組み合わせ術と存在論の研究

研究課題名(英文)Texts and Tables in Beckett's Published texts and Manuscripts: A Study of Leibnizian Ars Combinatoria and Ontology

研究代表者

森 尚也 (MORI, Naoya)

神戸女子大学・文学部・教授

研究者番号：80166363

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：ベケット作品には、ライプニッツの形而上学が現れる。だがその目的や意義は解明されていない。本研究はベケットが執筆過程で数式や図表を多用していた事に注目し、その意味を考察するものである。

テキストが断片、非連続性を表現するのに対し、数式や図表は個や時空を超えた連続性、全知の視点から作品を構成する。とりわけ図表は『ワット』や『事の次第』の草稿に頻出する。ベケットの登場人物達は、徹底的に「個」の限られた視点から漠たる現実をむなしく捉えようとするが、他方で図表の使用は、全知の神の視点から全体を見渡していることを物語る。本研究はベケット作品におけるこうしたライプニッツ形而上学の両義性を指摘するものだった。

研究成果の概要(英文)：Some of the Leibnizian metaphysical terms such as “monad” and “windowless” appear in Beckett’s works, but the purpose and the essence remain unresolved. Focusing upon Beckett’s outstanding use of mathematical calculations and tables in the process of his writings, especially in works such as Watt and How It Is, this study aims at clarifying their unresolved significance in the light of Leibniz’s metaphysics.

While texts in general represent fragments and discontinuity, mathematical calculations and tables base themselves on continuity or on an omnipotent viewpoint that stands outside the individual or on a specific time and place. For example, Beckett’s characters try in vain to grasp who and where they are and how they got there from their limited perspectives, Beckett’s calculations and tables, however, refer to an omnipotent point of view that commands a general overview.

This study has revealed the ambiguity of Leibniz’s metaphysics as such in Beckett’s works.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：ベケット ライプニッツ モナド 無窓性 微小表象 テキストと図 存在論 組み合わせ術

## 1. 研究開始当初の背景

「決定稿」を聖別化する従来の草稿研究ではなく、創作過程で生まれた手書きの草稿、メモなどの先駆稿にも独自の価値を認め、それらの間のダイナミズムに注目するテキストの生成論的研究が、多様な展開を続けるベケット研究においても、近年、批評の牽引力となっている。筆者は1988年から89年に、英国レディング大学の国際ベケット・ファンデーションで、ベケット草稿を研究した時、ベケットにおけるモナドの「無窓性」の重要性に気づき、拙論「ベケットのモナド的無窓世界、あるいは闘争する時計たち」(1996)を発表した。以来、ライプニッツ形而上学を通してベケット作品を読み直し、比較研究を続けている。ベケット研究を俯瞰すると、1963年に発表されたジェルメヌ・ブレによるベケットとライプニッツの先駆的研究以来、ライプニッツを主題として正面から取り上げているのは、拙論を除けばドゥルーズとの関連で論じたガリン・ダウド(1998)くらいである。1961年のヒュー・ケナーの「デカルト的ケンタウロス」をはじめとするベケット論が、ベケット研究の主流となっていたのと比べると雲泥の差がある。

2002年にトリニティ・カレッジ・ダブリンのパークリー図書館が所蔵するベケットの読書ノートが研究者に公開されるようになり、事情は一変した。ベケットと哲学の関係を実証的にひもとく手がかりができた。なかでもライプニッツを古今の形而上学の結実点として評価したヴィンデルバントの『哲学史』は、若きベケットの心を捉え、膨大な時間をかけて詳細な要約を試みさせていた。それが「哲学ノート」と呼ばれる1930年代前半の読書ノートであり、そこにはデカルトよりもはるかに多くの記述がライプニッツについて残されていた。

筆者にとって「哲学ノート」の公開は、これまでの仮説を実証する契機となった。2010年度、パークリー図書館での「哲学ノート」に向き合う機会を得た。そこには「微小表象」「二つの時計」「無窓性」など、ライプニッツ形而上学の主題群についてのベケットのメモが次々に見つかった。これまで拙論で取り組んできた両者の形而上学をめぐる関係の裏付けとなるものである。同時にヴィンデルバントの『哲学史』が提起する形而上学と存在論、数学と存在論の問題に、ベケットが大きな関心を寄せていることにも改めて気づかされた。かつてベケットは自作品について「一連の運動だけだ」(“Just a series of movements”)と語っていたし、『クワッド』、『ワット』、さらには『ゴドー』にさえもその運動、ライプニッツ的「組み合わせせ術」は読み取れる。ベケットによる数学の導入は、演劇や小説の根幹にあった原因と結果の連鎖から作品を解放すること、すなわち因果律の排除にあるとか

ねてより考えていた。しかし、図表はさらに別の次元での意味を持つことにも思い当たった。

それについて述べる前に、生成論的草稿研究をその方法論として用いる理由を説明しておくべきだろう。ベケットにおける生成論的草稿研究の先駆となったゴンタースキーが「具体から抽象へ」(1985)として示したように、ベケットは最終稿に至るまでの過程で、自伝的逸話や具体的な作品の素材を抹消し、抽象化してしまう傾向があるからである。実際、ベケットはライプニッツについても、草稿では言及しながら、最終稿では消している場合がある。つまり草稿でなければ確認できないテキストや数式、図表が多々存在するのである。

そこで『ワット』や『事の次第』の草稿ノートに見られる数式や図表の意味である。図表とは、ベケットが「具体から抽象へ」というテキスト生成の運動だけでなく、「抽象から具体へ」(「普遍から個へ」という逆向きのベクトルも用いて創作をしていたことの証しである。テキストが断片、非連続性を表現するのに対して、数式や図式は、個や時空を超えた連続性を表現し、普遍的な全知の視点から作品を構成し、関与する。つまり、図表とは個の視点を越えた、神の視点の導入を意味するのである。このように二つの逆向きのベクトルを使いながら、自己と世界の間を捉えようとした哲学者にライプニッツがいた。ライプニッツ研究者酒井潔教授は、「ライプニッツは一方でテキストや文字で考え、他方において図でも考えた。[中略]彼はテキストを書くより前に図を書き、後で削除した、とも伝えられる」(2008)と述べている。これは、まるでベケットの創作方法を論じているかのようでもある。ライプニッツによる両者の相補的利用は、普遍的な問題を目指す形而上学と特殊を捉える個別学を相補的に使ったことと結びついているとも酒井は指摘している。そして個と普遍の問題は、ベケットがジョイス論「ダンテ・ブルーノ・ヴィーコ・ジョイス」(1929)で詩と形而上学として捉え、個の感情を抹消する形而上学ではなく、詩を擁護していた。

その後、ベケットは個の視点に徹底的にこだわる「唯名論」的手法を1937年の「ドイツ語の手紙」で宣言していたのだが、スピノザ-ライプニッツの形而上学の影響を受け、その手法に修正を施したと考えられる。「永遠の相のもとで」個を捉える視点を加えたのだった。「個別」「唯名論」にこだわる基本的な立場は終生変わらなかったが、草稿の図表は「普遍」(永遠の相)の立場を、ベケットが作品に導入したことの証である。ライプニッツが個の重視(モナドの無窓性と自己充足)を唱える一方で、窓のないモナド間の調停に「予定調和」という普遍的、超越的な神の視点を持ち出した

のと似ている。かくして個と普遍の視点がぶつかり合うとき、「予定調和」のもとで「個の自由」が存在しうるかどうかの疑問が、ライブニッツにおいてと同様に、ベケットにおいても浮上する。ライブニッツが「自由の迷宮」と呼んだ問題である。この「自由」の問題こそ、実は『マーフィー』創作ノート(Whoroscope Notebook)にベケットが記している『マーフィー』の隠れた主題なのである。いまだ論じられていない、このメモを読み解くことも、この課題の重要な一章をなすだろう。以上が、本研究を進めるうえでの、生成論的草稿研究の意義である。

## 2. 研究の目的

かつてベケットは自作品を「一連の運動だけだ」(“Just a series of movements”)と語った。事実、小説『ワット』、『事の次第』、戯曲『ゴドーを待ちながら』、『勝負の終わり』、『クウッド』など、表現媒体や表現形式、運動の速度は違っても、ベケットがある種の存在論哲学、先在的数学構造に則ったトポロジカルな運動を表現していたことが見えてくる。そのテキスト、とりわけ草稿に書かれた数式や図表が浮かび上がらせるのは、ライブニッツの組み合わせ術、生死を超えた終わりなきモナド的運動と存在論である。

## 3. 研究の方法

(1)以下の5つのトピックのもとに、「ライブニッツ的組み合わせ術:数学と存在論」の主題を考察。

テキストと図

セリーの運動

個と普遍、部分と全体、微小表象、視点と尺度の変換

辺/対角線の通約不能性

可能性/共可能性:存在をめぐる闘争

(2)ベケット草稿にある「数式と図表」を精査し、主題のもとに考察する。

ベケット草稿研究を実施した図書館:

2012: ワシントン大学(米、セントルイス);

オハイオ州立大学(米、オハイオ)

2013: バークリー(アイルランド、トリニティ・カレッジ・ダブリン)

2014: パリ国立図書館リシュリユー(フランス)

2016: レディング大学図書館(英、レディング)

2017: パリ国立図書館リシュリユー(フランス)

## 4. 研究成果

この研究の位置づけは、「研究開始当初の背景」にも書いたが、ベケット文学をライブニッツ形而上学と比較して読む試みである。この研究は、国内では筆者の知る限り他に

ない。海外でも継続的にベケット/ライブニッツを比較研究している研究者はほとんどいない。ガリン・ダウド、クリス・エッカーリーの論文も単発的であり、草稿研究でめざましい研究成果をあげたマシュー・フェルドマンの *Beckett's Books* においても、ライブニッツは登場するものの、その意味を捉えかねている。

ここで主題としてあげた5つのトピック—「トポロジカルな運動」「個と普遍」「通約不能性」「微小表象」「入れ子宇宙」—はすべて、ライブニッツ形而上学の重要な概念であり、それぞれの主題のもと、ある程度、ベケットととの比較考察をまとめることができたと考える。ただ(2)の「数式と図表」については、口頭発表はしたもののまだ論文化できていない。『クウッドの最後のテープ』や『事の次第』を中心とする「図表」の意味を論じる論文を、次の課題として仕上げていきたい。

草稿研究においても、いくつか発見があった。一部紹介すると、ベケット戯曲作品『勝負の終わり』のタイプ原稿にライブニッツの連続律を示す言葉「自然は飛躍せず」(*La nature ne fait pas de sauts*)が使われていたことは指摘されていたが(井上、1995)、それ以前の手書きフランス語初期草稿にも、その言葉が見つかった。また、やはりベケット戯曲作品『ゴドーを待ちながら』のフランス語初期草稿からは、ライブニッツ形而上学のモナドを定義する言葉が見つかったことは世界的にもまだ指摘されていない。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

森尚也「無窓性」再考: サミュエル・ベケットのバロック的唯我論、神戸女子大学文学部紀要50巻、2017年、49-60頁(査読あり)

森尚也「ベケット『メルシエとカミエ』における「泥棒たちの巣窟」——逸脱する運動と「無窓性」のなかの連帯——」神戸女子大学文学部紀要49巻、2016年、1-14頁(査読あり)

Naoya Mori, “Beckett's Faint Cries:

Leibniz's *Petites Perceptions* in *First*

*Love and Malone Dies*” in *Samuel Beckett*

*Today/Aujourd'hui*, Vol. 24, ed. Angela

Moorjani (New York: Rdopi, 2012), 189-204 (383)(査読あり).

森尚也『砂粒の叫び—ベケット作品における微小表象』『ライブニッツ研究第2号』、2012年、109-127頁(査読あり)。

〔学会発表〕(計7件)

森尚也「ベケットの〈旅〉を考える——メアリ・ブライデン“Dynamic Still”を手がかりに」、サミュエル・ベケット・シンポジウム：“Responding to Mary Bryden’s Legacy”、東京大学駒場キャンパス(東京都文京区駒場) 2016年11月13日。

Naoya Mori, “Reading Beckett’s Doodles for ‘Sasha Murphy’” IASIL-Japan, 国際基督教大学(東京都三鷹市大沢) 2016年10月15日。

森尚也「ベケットのバロック的唯我論」日本ライブニッツ協会春季シンポジウム「『モナドロジー』300年」学習院大学(東京都豊島区目白)、2015年3月27日。

森尚也「ベケット作品における通約不能性—ピュタゴラス、クザーヌス、ライブニッツ」日本ライブニッツ協会第6回大会、富山大学五福キャンパス(富山大学富山市五福)、2014年11月16日。

森尚也「ベケットのフランス語詩と『メルシエとカミエ』に見る表象と運動」早稲田大学(東京都新宿区戸塚町)、2014年7月5日。

Naoya Mori, “‘The Splendid Little Pictures’ of Leibniz, Swift and Beckett,” International Symposium: Samuel Beckett and the ‘State’ of Ireland III, University College Dublin (Ireland), Saturday 3 August, 2013.

森尚也「ベケット、スウィフト、ライブニッツの入れ子宇宙」日本ライブニッツ協会の第5回大会、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区三田)、2013年11月17日。

〔図書〕(計5件)

森尚也「ベケットの『初恋』、あるいは声と存在の識閥の彼方」、『サミュエル・ベケットと批評の遠近法』、井上善幸、近藤耕人

編、未知谷出版、2016年11月、358-378頁(全524頁)。

森尚也『追放者のトポロジー—ベケットと運動のエチカ—』、岡室美奈子編『サミュエル・ベケット展図録—ドアはわからないくらいに開いている』、早稲田演劇博物館、2014年5月、100-105頁(全119頁)。

Naoya Mori, “An Animal Inside: Beckett/Leibniz’s Stone, Animal, Human and the Unborn,” in *Beckett and Animals*, edited by Mary Bryden (New York: Cambridge University Press, 2013), 71-81(230) (査読あり)。

森尚也「絵画と詩とモナドロジー—手紙と日記から見たベケットの詩学形成」(岡室美奈子、川島健編『ベケットを見る八つの方法』、水声社、2013年3月、179-196頁(全385頁)。

森尚也「現代文学から見たライブニッツ—サミュエル・ベケットの形而上学批判」、酒井潔、佐々木能章、長綱啓典編『ライブニッツ読本』、法政大学出版局、2012年、262-272頁(356+48頁)。

〔その他〕  
ホームページ等  
researchmap 研究者資料公開  
<http://researchmap.jp/murtv1tzv-183240/2/>

6. 研究組織  
(1) 研究代表者

森 尚也 (MORI, Naoya)  
神戸女子大学・文学部・教授  
研究者番号：80166363